

うでくらべまえひょうばんき
藝 競 前 評 判 記

笹井邦平

第11回 森田澄夫

テノールリサイタル

― 悲しみと嘆きの向こうに ―

― 和洋の織りなす三つの軌跡 ―

4月4日 14時30分

津田ホール

声楽家の森田澄夫師(テノール)の今回のリサイタルは全曲邦楽器の伴奏による新作歌曲―というユニークなプログラムである。

森田師は母が宮城道雄直門の箏曲演奏家、父も仕事は別に持っていたが琴古流の尺八奏者―という家に生まれ、子供の頃から家の中ではいつも邦楽が流れ身体に染み付いていた。

やがて師は逆に洋楽に目覚め、東京芸術大学大学院修了後イタリアに留学し、オペラをはじめとする素晴らしい

本場の音楽に浸りながらも、日本人としての自分がそこにいるのを感じながらの5年間を過ごした。

母の芸道50周年記念の演奏会に合わせて帰国することになった師が立てた目標はイタリアと日本の歌の両方を演奏することだった。

帰国後の最初の演奏会には宮城道雄作曲・交声曲「日蓮」を演奏、師はこの前後合せておそ30回に亘り独唱・指揮・合唱指導、また、宮城宗家依頼による五線譜スコア・及び縦譜の校訂などを担当し、この曲と深く係わりあうことになる。そして、もう1曲は菅原明朗編曲「箏・独唱・オーケストラのための『千鳥の曲』」を演奏し、邦楽と馴染みの深い2曲から始まった。その後、声楽家としてオペラをはじめとするいろいろな声楽曲を演奏する一方、宮城曲を中心に邦楽家との演奏など邦楽と多彩な係わりを持つことになる。

「リサイタルは1回目から日本とイタリアの曲を中心に演奏してきました。また、日本の曲はピアノ伴奏の曲とともに、邦楽器を用いた作品(委嘱

作品を含む)を入れるようにプログラムを組んできました。

演奏者は山本邦山・砂崎知子・多忠麿・吉村七重各師をはじめ素晴らしい方々が共演してくださいました。また、リサイタルには数えていませんが、邦楽器のみを使用した演奏会も何度か行ってきました」と森田師は邦楽との強い絆を語る。

その師が現代邦楽の演奏会に行った、歌付きの邦楽作品を探しまわっている時に出会った曲の1つが齊藤隆介原作・三木稔作曲「ペロ出しチョンマ」だった。ドラマやストーリー性のある作品に魅力を感じていた師に「ペロ出しチョンマ」はとても新鮮な感動を与えた。しかし、このような作品は他にはなかなか見あたらず、歌曲自体が現代邦楽といわれる世界において非常に稀であることを実感せざるをえなかった。

そこで6年前に自身の所属する詩人・作曲家・声楽家が集って現代の日本歌曲の創作活動を行なっている団体である(社)日本歌曲振興会主催によ



森田澄夫師

り「邦楽器とともに―新しい日本歌曲の夕べ―新作歌曲を揃えて」というタイトルの邦楽器を使用した新作の日本歌曲の会を始めることになった。今回の3作品はこのコンサートで生まれたものである。「与吉のオラシヨ」は昨年このコンサートで前半のみを演奏しこのリサイタルで全編を演奏して完成初演となる。

曲目は「与吉のオラシヨ」「折り鶴抄」「宵待人」でいずれも木下宣子作詩・台本、池上眞吾作曲である。演奏は箏・胡弓・三絃―池上眞吾、十七絃―平野裕子、箏・十七絃―利根英法、笛―木村俊介、尺八―田嶋謙一、囃子

―望月晴美。

「私が詩人の木下宣子氏・作曲の池上眞吾師とともに係わったこの3作品は何れも歌と語りによる歌物語です。これらはテーマ設定の最初の段階から何度も話し合いを重ねながら3人で創りあげました。どの曲も以前から関心を持っていったテーマです。

『宵待人』はよく知られた美人画家としての竹久夢二ではない、リベラリストとしての側面を鮮やかに描き出した作品です。夢二が生涯を賭けて追い求めたものは「へみな平等」という思想でした。

『折り鶴抄』は広島で被爆した折り鶴の少女・佐々木禎子の話を禎子が死ぬまで折り続けていた鶴を主人公に描いたものです

『与吉のオラシヨ』は以前より深い関心を寄せていた隠れキリシタンの話で、明治になってもなおキリシタン弾圧が行なわれた長崎県五島で、迫害を受け殉死した農民の家族愛と祈り、そして救いをテーマにした作品です。

登場人物の語り分けと多彩な邦楽器

の音色もお楽しみ下さい」と師は作品への熱い想いを語る。

この3曲の間に「間奏曲」という邦楽器の器楽曲が入り、曲間に気分を変えするための作品として今回あらたに創作された。そして、「折り鶴抄」と「与吉のオラシヨ」の2曲には民俗舞踊家・小島千絵子師（鼓童）の踊りが入る。自由奔放で表現力豊かな彼女の舞踊が楽しみである。

また、「大逆事件」にも係わりのあった夢二の側面を語るコーナーとして竹久夢二美術館の学芸員・谷口朋子氏と詩人・木下宣子氏との対談「夢二の待っていたもの」が設けてありこれも興味深い。

「お陰さまで以前から強い関心を持っていったテーマがこうして3つのストーリー仕立ての作品に仕上りました。才能溢れる若き共演者達と一人の声楽家が創り出す歌物語、洋楽の声を邦楽器の醸し出す響きに乗せて歌い語りながら、これらの作品をどこまで表現できるか―聴衆の皆様の想像力を喚起出来ることを願っています。

「邦楽の友」2010年3月号掲載（続き）

声楽家・邦楽奏者双方が演奏に喜びを感じられる作品、言い換えれば声楽家が歌える邦楽器を使用した素晴らしい歌の作品が数多く生み出されることを願っています。そして多くの声楽家達がピアノ伴奏の曲を歌うように、これらの邦楽器の作品を取り上げられるようになることを希望します。また、邦楽の演奏会でもこれらの作品が邦楽曲とともに演奏されることを祈って止みません。数多くの歌曲を生み出し、声楽家に初演させた楽聖・宮城道雄が夢見て実行した世界のように……と森田師の邦楽への熱いラブコールは留まるところを知らない。

オペラに魅了されながらも日本人であることを捨てずにその民族音楽への熱い想いを胸に抱き、宮城道雄という邦楽に洋楽を取り入れた巨匠に導かれて洋楽と邦楽の架け橋を築こうとしている声楽家に温かいエールを私は贈りたい。

森田澄夫 第11回 テノールリサイタル

悲しみと嘆きの向こうに ～和洋の織りなす三つの軌跡～

木下宣子 詩・台本 歌物語「与吉のオラシヨ」(初演)

池上眞吾 曲 「折り鶴抄」「宵待人」「聞奏曲」(初演)

対談「夢二の待っていたもの」谷口朋子(竹久夢二美術館学芸員) 聞き手 木下宣子

森田澄夫(テノール) 池上眞吾(作曲・箏・胡弓・三絃)

平野裕子(十七絃) 利根英法(箏・十七絃)

木村俊介(笛) 田嶋謙一(尺八) 望月晴美(囃子)

小島千絵子(鼓童)(民俗芸能舞踊・ゲスト)

4/4(日) 2:30PM 津田ホール

全自由席 前売¥4,000 当日¥4,500

主催=VIVA VOCE

後援=(社)日本歌曲振興会 (財)日本オペラ振興会 日本オペラ協会

(有)邦楽ジャーナル 大日本家庭音楽会 竹久夢二美術館

チケット=電子チケットぴあ0570-02-9999

東京文化会館チケットサービス03-5685-0650

マネジメント・お問合せ・チケット=武智音楽事務所 TEL&FAX03-3371-1250

<http://homepage2.nifty.com/takechi/> t-music@ac.auone-net.jp

「ぶらあぼ」2010年 3月号 掲載

第11回 森田澄夫 テノールリサイタル

●4/4 津田ホール(東京)

人間や家族の絆、原爆や銃弾に倒れた人々のさまざまな思いを、クラシックの定型にとらわれることなく歌い続けている森田澄夫。所属する日本歌曲振興会の公演では邦楽器を伴奏に使ったオペラ作品を取り上げてきたが、本リサイタルでも池上眞吾を作曲に迎え、木下宣子の詩と台本をもとにした「歌物語」で構成する。画家の竹久夢二をモチーフにした『宵待人』と広島で被爆した佐々木禎子の『折り鶴抄』はいずれも歌曲振興会のシリーズ公演の中から生まれた作品で、とりわけ後者は大正ロマンの寵児と言われる夢二の意外な一面に触れた注目曲だ。谷口朋子(竹久夢二美術館学芸員)と木下の対談「夢二の待っていたもの」では、実は反骨のリベラリストでもあった夢二の横顔にクローズアップしていく。また、双方の作品との間に披露される間奏曲は今回が初演。作曲者の池上が箏・胡弓・三絃で登場するほか、平野裕子(17)、利根英法(箏・17)、木村俊介(笛)、田嶋謙一(尺)、望月晴美(囃子)が伴奏を務める。また、本公演で完結する『与吉のオラシヨ』は長崎の隠れキリシタンをテーマにした悲運の歌物語。拷問によって妻子を奪われるなか、残された与吉の生きざまを追う。鼓童の小島千絵子による表現力豊かな踊りも大きな見どころだろう。

宮城道雄直門の箏奏者を母親に持つ森田は、イタリアからの帰国と時を同じくしてクラシックと邦楽との接点を模索し続けてきた。「声楽と邦楽、双方の人たちにとって手応えのある作品がこれからどんどん出てくれば」と森田。詩と邦楽、そして声楽の三者が協同して作り上げた新たな世界に期待が集まる。

(→17頁)



森田澄夫

和洋の芸術が織りなす3つの「歌物語」を中心に